



遠い未来の目を持つ時、 真理が見えてくる。

工房アーティスト 鮫島 貴子

会議

東日本大震災で被災された方々に
心よりお見舞いを申し上げます。

今までに体験したことのない揺れ、その恐怖は首都圏にいた私達の生き方にも影響を与えたことは確かである。そして、大自然を前に私達は、その全てを受け入れる覚悟が必要だということを改めて思い知らされたのである。身を守る術があまりなかった時代と、コンクリートの防壁の中にいる現代人の抵抗力・耐久力？の違いは大きい。今こそ人間の立ち位置を再認識すべき時なのではないだろうか。

私は小学六年生から東京に住んでいるので、自分という人間は東京で形成されたのだと思うが、大阪に生まれ、父の転勤で小学四、五年の二年間を長野市(善光寺のそば)で過ごしたことが、私の人生に多くの影響を与えたと思う。自然がすぐそばにあり、その自然と対話しながら生きていく人と幼い頃に接する機会を得たことはとても大きかったと思う。

そうした環境が影響したのか、大学を卒業した頃から、自分の存在が自然の一部に近づけないかとずっと模索している。都会で暮らすこと自体がその考えと矛盾しているのだが……。

堆肥をつくり週末農園をやったり、自生する薬草でお茶を作ってみたり。いずれも都会にいながらというのには限界がある。それなのに、都会に居続けている。

都会に居ることの意味。ネット社会になった今、仕事によっては何処にでも住めるの



誕生

かもしれない。これからますます個人がどう生きたいのか、どう生きようとするのか、今まで以上に問われることになる。だが、どんな生き方を選ぼうと考えなくてはならないことがある。

「自然に敬意や畏怖の念を抱くことを遠ざけて、人間中心に生きていないか？」

自然を相手にしている農・漁・林業の人々はそうではないかもしれないが、それでもどこかで人間の事情を最優先にはしていないだろうか。

もともと私は「人」と「自然」をテーマにしているが、近年は特に『人と自然との共生』について考えている。

昨年は、「地球の声」というテーマで、地球は何を訴えているのかを想像した。

動植物は生活の場を追われ、悲鳴をあげてもその声はなかなか人間には届かない。

だが、私達が耳をそばだて、心の目を開いた

時、彼らの警告が私達の未来を左右する大切なメッセージであることがわかるのである。今回の新作「会議」で、人間以外の生きものや天空に居るであろう目に見えぬ存在(広義で神様?)から見た地球を表現した。私達は人間中心に考えた利便性、合理性をまず考えてしまいがちだが、果たしてそれが人間にとっての幸せに繋がるのか?もつと視野を広げて、遠い未来の目を持つ時、真理が見えてくるのではないだろうか・・・。

大きな時代の流れに逆らうことはもう無理だと言ってしまうはそれまでだが、一人一人が考え、行動することでやがて大きな変革となることだってあり得る。

私自身、一つ一つこれからも試行錯誤し、もがき続けるのであろう・・・。

大自然の中の一員として生きるために。



会議の中心・地球



元人間代表

「わしは昔、人間だった。もう少し未来を見据えたものの考え方をすべきじゃったのお。」



神話の国代表 猿田彦

「遠くからこの地球を眺めていると、どんどん灰色になっていくのが見える。」



海の生物代表

「皆さんは地上生活だからわからないと思うけど、海の中には毎日掃除してももう凄いのよ〜〜」



菌類代表

「住みたくない所に住むのはもういやだわ。」

工房アーティスト
鮫島 貴子

さめしま たかこ



東京学芸大学美術科(金属工芸)卒業。
山田照明(株)で企画などの仕事に従事する。国内外のものづくりを調査、研究する機会を得たことで('90~'91パリを拠点に活動)自らがつくる立場に帰ることを決意する。'95工房「アーティスト」を東京・大塚に開設。制作活動と並行して、ものづくりの楽しさ、大切さを知ってもらうために、工房内でものづくり教室を開いている。
www.atelier-artis.com



昆虫代表

「おいら江戸っ子だけどさ、最近よそもんが増えて住みづらんだよね。」



植物代表

「どんな時代になっても生き残る自信はあります。でも、なるべくなら太陽の下で生きたいです。」